武蔵野日曜集会

第二の徴
――ヨハネ伝第４章46～54節――

１９９４年６月19日
小池辰雄

創造の力　キリストに降参　第二の徴　体験せしめられて告白する　祈り

【ヨハネ４・46～54】

46イエス復ガリラヤのカナに往き給う、ここは前に水を葡萄酒になし給いし処なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みいたれば、47イエスのユダヤよりガリラヤに来り給えるを聞き、御許にゆきてカペナウムに下り、その子を医し給わんことを請う、子は死ぬばかりなりしなり。48ここにイエス言い給う『なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』49近臣いう『主よ、わが子の死なぬ間にくだり給え』50イエス言い給う『かえれ、汝の子は生くるなり』彼はイエスの言い給いしことを信じて帰りしが、51下る途中、僕ども往き遇いて、その子の生きたることを告ぐ。52その癒えはじめし時を問いしに『昨日の第七時に熱去れり』という。53父その時の、イエスが『なんじの子は生くるなり』と言い給いし時と同じきを知り、而して己も家の者もみな信じたり。54是はイエス、ユダヤよりガリラヤに往きて為し給える第二の徴なり。

●創造の力

46イエス復ガリラヤのカナに往き給う、ここは前に水を葡萄酒になし給いし処なり。

これが「第一の徴」だったわけです。水を葡萄酒にしてしまった。今度は「第二の徴」というわけです。大変なひとだね。水かと思ったら、飲んだら葡萄酒になってしまった。創造の力をもっているんだね、キリストというひとは。詩篇33篇に、

「エホバのみことばは直く、そのすべて行いたもうところ真実なればなり。エホバは義と公平とをこのみたもう、その仁慈はあまねく地にみつ。もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の気によりてつくられたり。……そはエホバ言いたまえば成り、おおせたまえば立てるがゆえなり。」（詩篇33・４～９）

とある。神・キリスト・聖霊の言葉というものは力をもっている。意味の世界ではない。力の世界です。

「神 光あれと言いたまいければ光ありき」

という世界です。大変なことだ。

46イエス復(また)ガリラヤのカナに往き給う、ここは前に水を葡萄酒になし給いし処なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みいたれば、

カペナウムはガリラヤ湖の北の方です。

47イエスのユダヤよりガリラヤに来り給えるを聞き、御許にゆきてカペナウムに下り、その子を医(いや)し給わんことを請(こ)う、子は死ぬばかりなりしなり。

48ここにイエス言い給う『なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』49近臣いう『主よ、わが子の死なぬ間にくだり給え』50イエス言い給う『かえれ、汝の子は生くるなり』

「もう生きたよ」

ということです。

「帰れ、汝の子は生くるなり」

というキリストのこの言葉の瞬間に治ってしまった、生き返ってしまった。キリストの言葉は実力をもっている。

「癒してください」

と言ったら、

「癒えたり」

と言う。現在完了です。

私が、五十肩で肩の痛い人に按手して、

「はいっ、治りました」

と言うと本当に治ってしまうんだ。みな、びっくりする。胃の悪い人は、刺激的な味の強いものを食べてはダメだ。本当の味というものは人間があまり加工しないそのままのものが一番いい味をもっている。自然というものは素晴らしい。あまり加工したものは反ってダメです。ある局部を治すというのではなくて、全身にこの大自然の力を受けることです。大自然と云おうが、神と云おうが、仏と云おうがいい。とにかく、そういう絶対界からの力を受けとることです。普通は、そういう上からの迫力を受けとらないから本当の生命力がないんだ。

●キリストに降参

あなた方は、困っている人や求めている人に本当に力を現してやりなさいよ。

「小池先生はやるけれども、我々はまだ……」

なんてことはない。誰でもできるんですから。それは自分をゼロにする。そうすると、これは無限大になってくる。このゼロは賜ったゼロなんだ。自分で成ったのではない。キリストが、私の相対的人間小池をぶっつぶしてしまって、

「私がお前の中に入っていくぞ」

と言って入ってくる。それだから、これ（私の中のキリスト）がギューンと現れてくる。信仰なんてものではない。私はこの「信仰」なんていう言葉は嫌いだ。

「何もありません、無です」

と言う。この無を賜った。キリストから無をいただいたから、キリストが無限無量の質をもって入ってくる。だから、何を読んでも、本当にそれが読める。何をしても、できる。それは自分で体験し体現しなくては。キリストは、

「汝らわが証人（あかしびと）となれ」

と言っている。

「研究せよ」

とは言ってやしない。キリストの直弟子たちはみな証人だ。その最たるものはパウロだ。一番キリストに逆らっていたやつが一番凄い証人になってしまった。パウロがなければ新約聖書がないと言ってもいいくらいだ。大変なひとです。彼はダマスコ途上でひっくり返された。私は阿蘇で光に撃たれて全身しびれてしまって、

「ああ、これが聖霊のバプテスマか」

ということになった。１９５０年の11月3日から5日の阿蘇の集会が私の次元的な飛躍だった。

48 **ここにイエス言い給う『なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』**

現象によって信ずる。それも悪くはないけれども、現象の前に――「信ずる」という言葉がまた躓きになるけれども――キリストという人物にびっくりして平伏す。信ずるより平伏した方がいい。

「参りました！」

と言って降参する。福音書を読んでキリストに降参するまでは、この世界に入れない。

「信じようか、信じまいか」

と、そんなことではない。

「キリストさま、あなたにはもう参りました！」

と言って平伏してごらん。そうしたら、キリストがつかまえて、本当の力を与えてくださるから。普通の人は

「こういうことがあるだろうか、ないだろうか。分からないけれども、信じておこう」

なんて思っている。そんなものは信仰でも何でもない。ところが、普通はそんな信仰なんだ。降参しなければダメですよ、相手は水を葡萄酒にするような人だから。もの凄い創造の力

をもった人だから。降参しなければいられないではないですか、イエス・キリストの前には。

「これは大変なひとだ、私はもう参りました」

と。そうすると、上から力がくる。「信仰」なんていう言葉はやめたほうがいい。信じ仰ぐよりも「降参」の方がいい。

●第二の徴

「なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ」

「徴」を見なければダメだという。キリストが

「私を見ろ」

と言う。

「あなたは、何だか知らないけれども、普通のひとではない。ちょっと次元が違う。別な世界のひとだ」

と、そういうようにキリストを見てきたら、今度はいい。そうするともう平伏すから、

「キリストの不思議は当然だ」

ということになる。そして、キリストは何と言ったかというと、

50 **イエス言い給う『かえれ、汝の子は生くるなり』**

「帰りなさい、もう生きているよ」

と。キリストが言ったその瞬間に治ってしまった。私たちも神さまの、イエス・キリストの力がもの凄いということを本当に身体（からだ）で受けとってごらん。そうしたら、こういう権威が出てくるから。「汝の子は生くるなり」では訳がダメだ。これは、

「汝の子は生けるなり。帰れ、汝の子は生きているぞ」

ということです。

彼はイエスの言い給いしことを信じて帰りしが、51 下る途中、僕ども往き遇いて、その子の生きたることを告ぐ。52 その癒えはじめし時を問いしに『昨日の第七時に熱去れり』という。

午後一時頃です。イエスが言った時と同じだと書いてある。

53 父その時の、イエスが『なんじの子は生くるなり』と言い給いし時と同じきを知り、而して己も家の者もみな信じたり。54 是はイエス、ユダヤよりガリラヤに往きて為し給える第二の徴なり。

第一の徴は水を葡萄酒にしたことです。そして、これが第二の徴です。

とにかく、我々もキリストの中に本当に入ると、何か知らんけれども、創造的な力で普通の医者ができないところの癒しができる。西洋医学ではどうにもならなくて、鍼（はり）が非常にきくようなことをテレビでやっていた。キリストは鍼以上なんだ、鍼も要らない。キリストは言葉だけで治してしまう。そういう熾んな生命力の中に、皆さんはお入りなさいよ。

それにはキリストと一つになることです。キリストを信ずるではなくて、キリストと一如になる。とにかく、一つにならなければダメです。あの信ずるという言葉はダメだ。一如がいい。

「われキリストの中に、キリストわがうちに」

という内在関係です。キリストと一つになることがいい。信仰なんていう言葉はもうやめた方がいい。

「受けとりました、入りました」

ということ。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

という内在関係です。

こうやって花を見る。花を外から観察すると

「色が赤だ、白だ」

なんて、何とかかんとか言うけれども、本当に花を見ている人は自分が花にならなくてはダメです。花を見て花となる、その時に本当に花を見ている人なんです。そうすると楽しくてしょうがない。

●体験せしめられて告白する

一般のキリスト教の学者みたいな人は研究してものを書いている。頭で書いている。ダメだよ、そんなのは。聖書は頭で書いた本ではない。これは全部、体験せしめられて告白している本です。聖書は告白なんです。ゲーテは、

「私の書いたものは全部、告白である」

と言った。さすがはゲーテだ。彼の文学が素晴らしいのは、彼が本当に体験したことを告白して書いているからです。頭でひねり出したものではない。それは『ファウスト』を読んでも感じます。漱石さんはかなりいいけれども、やはり次元がまだちょっとひくい。ユゴーの『レ・ミゼラブル』はいい。トルストイやドストエフスキー、あのへんはみな一流だ。それは全部、告白的だからです。今の若い人は第一流のものを読まなくては、もったいないよ。

「汝の子はもう生きている」

と、第二の徴を現した。神の生命力というものは――私たちにはキリストが媒介ですけれども――キリストの生命力というものはもの凄いものだから、これを受けとって、そしてこれを人に分けなくては。それが証（あかし）だから。聖霊の権威ははっきりもたなければダメです。本当の神交の世界は一％も疑いのない世界、百％に受けとっている世界です。

聖書には形容詞がない。「…であろう」という蓋然（がいぜん）性の言葉もない、全部断定の言葉である。口語訳聖書に

「……であろう」
なんて訳してあるのはダメです、「……である」だ。未来のことでも全部、
「……である。必ず成る」
と訳す。
「神の国は必ず来る。今現に我々の中に来ている」
と。キリストがこうやって、現在の形でもって
「**癒えたり**」
とか、
「**恐れるな**」
とか仰る。キリストに圧倒されて生きていないとね。信ずるではない。圧倒されて生きているだけのはなしです。
「私の信仰は……」
なんて、自分の信仰なんか考える必要はひとつもない。そういう簡単明瞭な世界です。だから、キリストが
「幼児（おさなご）の如くならずば天国に入れない」
と言ったのはそのことなんです。幼児は百％だから、お母さんの言うことはそのまま受けとる。「でも」はひとつも要らない。全部、
「はいっ」
と言う。
「それでも、こうです。あるいは、こういう場合は」
なんていう、条件付きは要らない。全部、無条件です。それが本当の力の世界です。本当の宗教は最大の力をもっている。
宗教を土台にもたない人生はダメだ。宗教は後生願いではないんだ。普通は、終わる頃に坊さんにお経をあげてもらったりする。こっちは毎日、讃美歌を歌っているようなものだ。どんな運命環境においても讃美歌を、神を讃える歌が歌えなければダメです。歌っていて、それで勝ってしまう。何も声を出して歌わなくてもいい。讃美歌というのはそういう意味で大事なものだ。神讃美ということです。聖書を読んで讃美歌ばかり歌って、それで今日はお終いと――私は何も話さない――そういう集会を今度やろうかな。
第一の徴は、水が葡萄酒に変わってしまった。第二の徴は、病が直ちに治ってしまった。皆さんはみな、キリストに在って、そういう力を頂いているのだから、遠慮なく証しなくては。我々を通して、無限にキリストは証をしておられるわけです。

●祈り

祈ります。

二千年前も今も同じく生きて働きたもうところの主さま、あなたの聖霊の聖力によって、また力ある御言によって、この朝も導かれ、これを語るも聞くも同じく受けとらせてくださいましてありがとうございました。どうぞ、このヨハネ伝の４章にありましたごとく、本当に「既に生きたり」と、このような現実を展開しておられるところの、また、水を葡萄酒に直ちに変える驚くべき力をもっていらっしゃる創造的な主さま、私たちはあなたの中に飛び込んで、そのあなたの創造的な驚くべき力にあずかって、あなたを証していきたく存じております。いよいよ、そのように御導きくださらんことを願い奉ります。ここに集まっている兄弟姉妹たちは全部それができます。そのことを本当に聖名のゆえに感謝いたします。

そのようにして、私たちはキリストさまの直弟子の次元にいよいよ入れられて、その証し人として暮らしてまいります。いよいよ、証より証へと、あなたが導いてくださることを信じて、聖名を讃え奉ります。必ずすべてのことが成っていきます。どうぞ、イエスさま、この兄弟姉妹たちを十全にお使いくださらんことを願い奉ります。まだたくさん祈りたいことがありますが、どうぞ、あなたの聖名の故にその祈りを聞いてください。この心からの感謝と讃美を、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名に在って献げ奉る。アーメン。

一回一回の集会が大事です。集会のない日曜日は大いに聖書に読み入ってください。キリストと一つになることを、とにかく、体験していかないことにはつまらんです。これを毎日の生活の中に、ある瞬間で結構ですから、体験していく。そして、人に証していく。我々は証(あかし)びとなんです。説明びとではない。説明の世界は二段構えでダメです。直接の世界は証なんです。

聖書を読んでいて、楽しくなって、力がグーッとこなければ、本当に読んでいるのではない。聖書くらい楽しい本はない。

「聖書は難しい」

なんて、とんでもないはなしだ。ちっとも難しくはない。一番楽しくてやさしい本なんです、それはキリストの中に入れば。キリストの行為もみな告白だから、語るも行うも全部同じ、同質です。あなた方一人一人はそのような顕然たる証し人としていよいよ進んでいただきましょう。